

第9章

教員生活に関する意識

- 第1節 指導の得意・苦手
- 第2節 教員の悩み
- 第3節 教員生活への満足感
- 第4節 将来展望
- 第5節 教員生活に対する思い(自由記述分析)
(第1節～第4節 朝永 昌孝、第5節 直井 多美子)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編

第1節

指導の得意・苦手

小学校教員がもっとも指導が得意な教科は「算数」で、86.0%が「得意」と回答している。教職経験年数に比例して指導が得意な教員がもっとも顕著に増えるのは「国語」。一方、「理科」は教職経験年数による変化があまりみられない。

【Q10(小・教員)】

教育活動の成否にとって、学校教育の直接的担い手である教員が、どのような資質や力量をもつのかは重要な問題である。近年、いわゆる「指導力不足教員」の存在やその対応策が問題となっているが、こうした流れのなかで、2007年に新しい「教育職員免許法」が成立し、2009年から教員免許更新制が導入される予定であるなど、教員の資質や力量の保持や向上を目指しての政策が実施されている。

ところで、一人の教員の立場から指導力という点をみるならば、得意や苦手があるのは現実だろう。とくに小学校では、一人の教員が多くの教科の指導を担当する学級担任制が一般的である。最低限の資質や力量は必須とはいえ、限られた時間と資源のなか、教員にも得意や苦手があろう。そこで本節では、小学校教員に対して、「次の教科や領域を指導することが得意ですか」とたずねた結果から、教員の意識をみていくことにしたい。

1) もっとも指導が得意な教科は「算数」

図9-1-1によれば、「得意」(「得意」+「どちらか」と得意)の%、以下同)の割合がもっとも高かったのは「算数」で、86.0%の小学校教員が得意であると回答している。次いで、「国語」が59.5%で続く。以下、「道徳」が47.2%で、「社会」が45.5%、「理科」が43.6%と、い

れも4割台となっている。これに対して、「得意」の割合がもっとも低かったのは、「総合的な学習の時間」であり37.5%にとどまった。

このように、教科・領域によって、得意な教員が多いものと少ないものがあり、小学校教員が指導に自信をもっているのは、圧倒的に算数であることがわかった。これは、算数は、解法や解答が比較的わかりやすく、そのため指導法が定まっているといった理由があるのではないかと推測される。

2) 「国語」は女性、「社会」と「理科」は男性の教員のほうが得意

次に、指導の得意・苦手を性別にみてみよう(図9-1-2)。全体でもっとも「得意」という回答の割合が高かった「算数」についてみると、男性で86.3%、女性で85.9%が「得意」と回答しており、性別による違いはみられない。

一方、「国語」については、男性が44.6%、女性が68.0%と、女性のほうが「得意」という回答の割合が高い。これとは反対に、「社会」は男性が62.2%で女性が36.4%、「理科」は男性が61.0%で女性が33.9%と、男性のほうが女性よりも「得意」と回答する割合が高かった。「道徳」と「総合的な学習の時間」については、性別による違いはほとんどみられなかった。このように、教科・領域によって相違がみられる。

図9-1-1 指導の得意・苦手（小学校教員）（n=1,872）

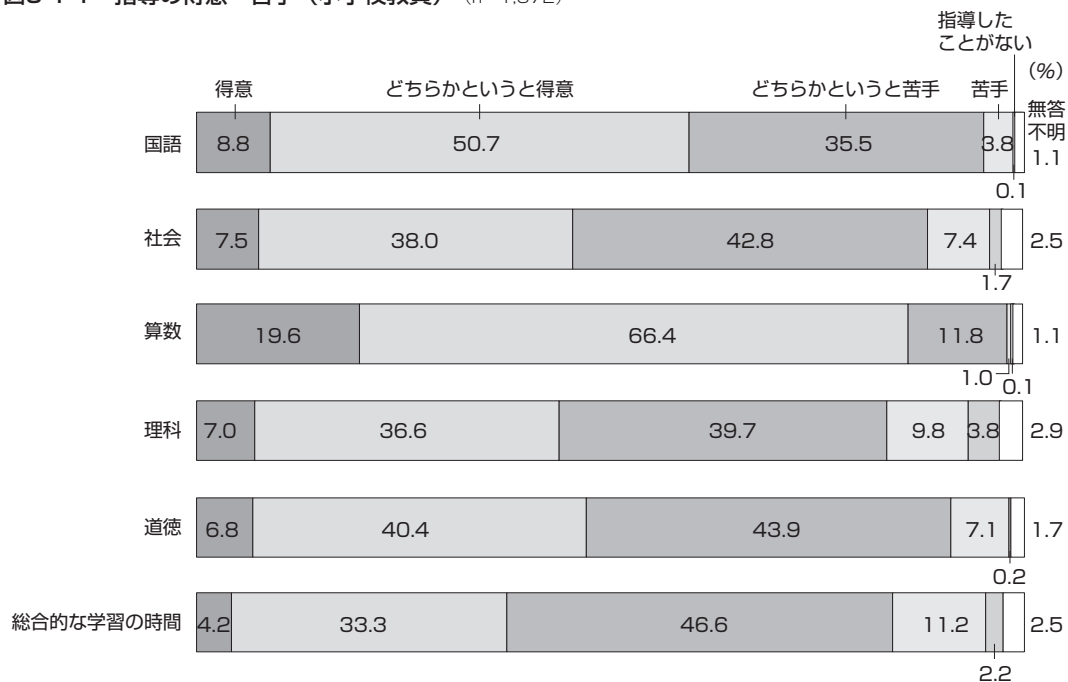
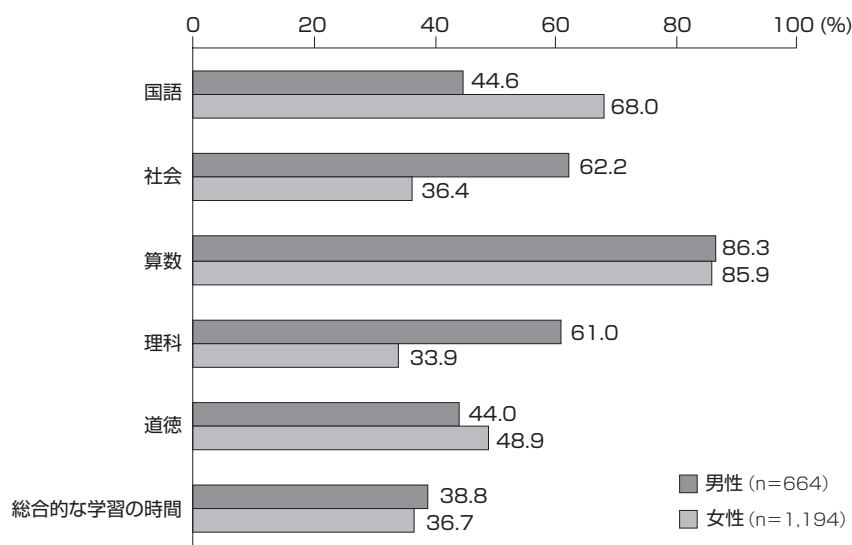


図9-1-2 指導の得意・苦手（小学校教員／性別）



注) 数値は「得意」+「どちらかという得意」の%。

3) 「国語」はもっとも顕著に教職経験年数に比例して、得意が増加

指導について教員の熟達という観点から考えれば、経験を重ねることで、知識・技術を身につけ、自信も深まっていくと考えられる。そこで、教職経験年数別に指導の得意・苦手をみたものが、図9-1-3である。これによると、教職経験年数が増えることに比例して、「得意」の割合が高くなる教科・領域と、そうではないものとがみられた。

教職経験を重ねるにつれて、「得意」の割合が明らかに高くなるものとしては、まず「算数」があげられる。「得意」の割合は、「5年目以下」が71.8%、「6～10年目」が78.3%である。そして、「11～20年目」「21～30年目」「31年目以上」では、ほぼ9割となっている。さらに顕著に教職経験年数に比例して「得意」の割合が高まるのは、「国語」である。「5年目以下」では40.9%だったのが、「6～10年目」で45.4%、「11～20年目」で55.4%、「21～30年目」で66.7%、そして「31年目以上」では77.1%となっており、指導経験や知識・技術の蓄積が、教科指導に対する意識に結びついていると考えられる。

このように、教職経験年数を重ねるにつれて、「得意」の割合が高まるという傾向は、増加幅の違いこそあるものの、「道徳」や「総合的な学習の時間」についても同様である。「道徳」につい

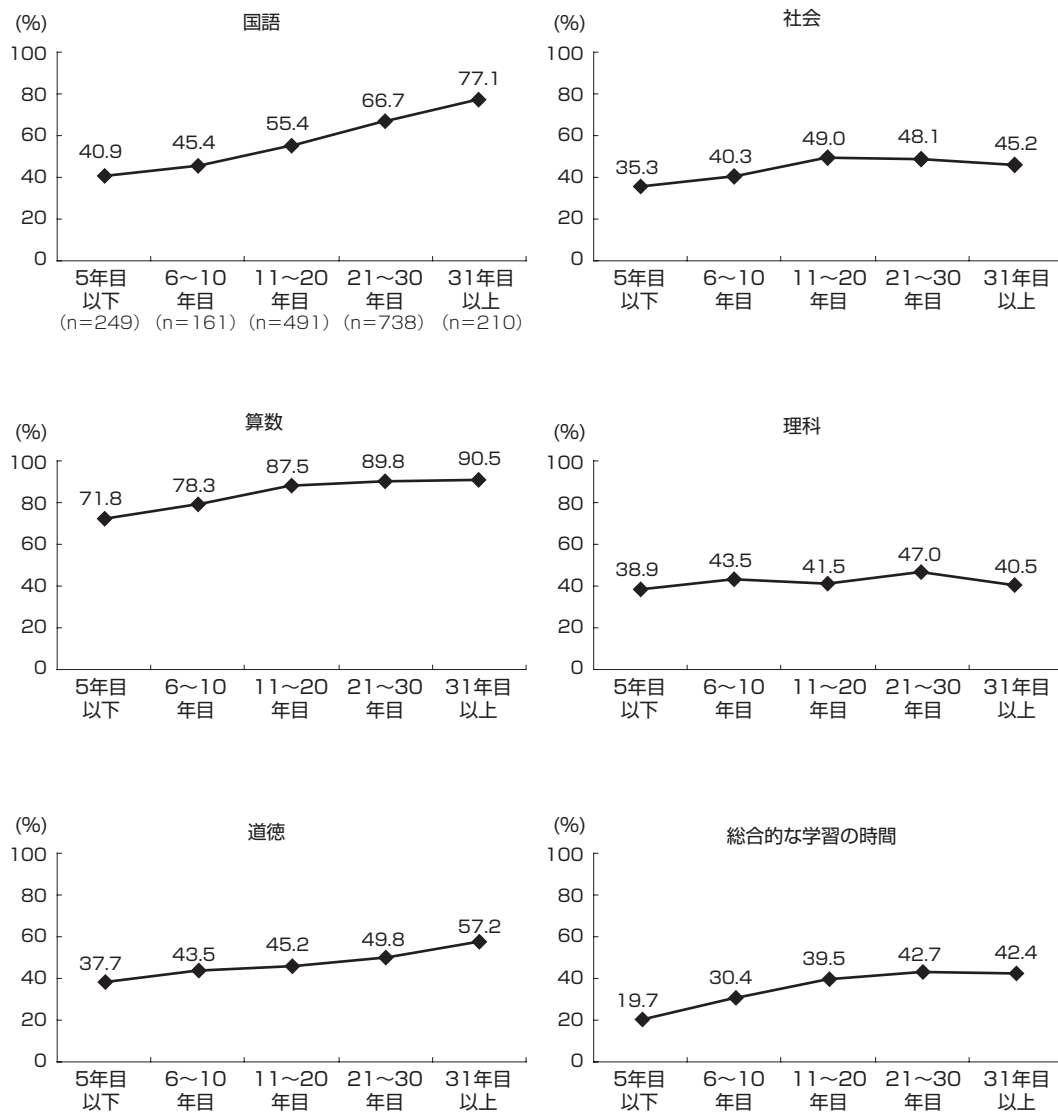
ては、「5年目以下」の37.7%に対し、「31年目以上」では57.2%、「総合的な学習の時間」については、「5年目以下」の19.7%に対し、「11～20年目」以上ではほぼ4割となっている。また、これらに比べると増加幅は小さく、「11～20年目」がもっとも「得意」の割合が高いという結果ではあるものの、「社会」も類似の傾向を示しているといえるだろう。

4) 「理科」の指導への自信は、教職経験年数と関係なし

これらに対して、「理科」は異なる結果を示していることが興味深い。「得意」の割合がもっとも低かったのは「5年目以下」(38.9%)であるが、次いで低いのは「31年目以上」(40.5%)であり、さらに「11～20年目」(41.5%)となっている。このように、「理科」の指導への自信は、教職経験年数に比例して高まるわけではないようである。ただし、これには教職経験年数が長い教員に女性が多いことが全体の傾向に影響していることも考えられる。

国際的な比較調査の結果からも、しばしば理科に対する理解力や興味・関心の低下など、子どもの理科離れが問題として語られる。しかし、本調査の結果によれば、教員にとっても「理科」は苦手意識をもちやすい、あるいは得意になりづらい教科であるのかもしれない。

図9-1-3 指導の得意・苦手（小学校教員／教職経験年数別）



注) 数値は「得意」+「どちらかという得意」の%。

第2節

教員の悩み

小・中学校ともに、日々の忙しさに悩みを感じている教員が多い。小学校よりも、中学校の教員のほうが、学習指導にかかわる悩みを感じている。【Q16(教員)】

8章でもみたように、教員が学校にいる時間は長くなっている。学校での教育活動の中心は学習指導であるが、それ以外にも教員は多様な業務を行っている。生活指導や学校行事、部活動の指導など、学習指導以外に直接的に子どもと接している時間はもちろんのこと、教材研究や授業準備、評価などのいわば間接的に子どもと接している時間、さらに、学校経営や事務書類作成、会議といった校務、そして保護者や地域といった外部への対応などがあげられる。

では、こうしたさまざまな業務があるなかで、教員自身はどのようなことに大変さを感じているのだろうか。そこで本節では、悩みとして考えられる15項目を示して、どれくらいあてはまるかをたずねた。なお、さらに具体的な内容については、本章5節で、教員生活の楽しさや悩みについて、自由記述回答の分析をしている。

1) 小・中学校の教員ともに、 日々の忙しさに悩みを感じている

図9-2-1は、「次のような悩みをどれくらい感じていますか」とたずねた結果について、「そう思う」「とてもそう思う」+「まあそう思う」の％、以下同)と回答した割合を示したものである。「そう思う」の割合が高かった順に5つあげると、小学校教員では、①「教材準備の時間が十分にとれない」(90.7%)、②「作成しなければならない事務書類が多い」(87.5%)、③「休日出勤や残業が多い」(72.1%)、④「図書費や

教材費が不足している」(70.4%)、⑤「児童間の学力差が大きくて授業がしにくい」(66.8%)となっている。

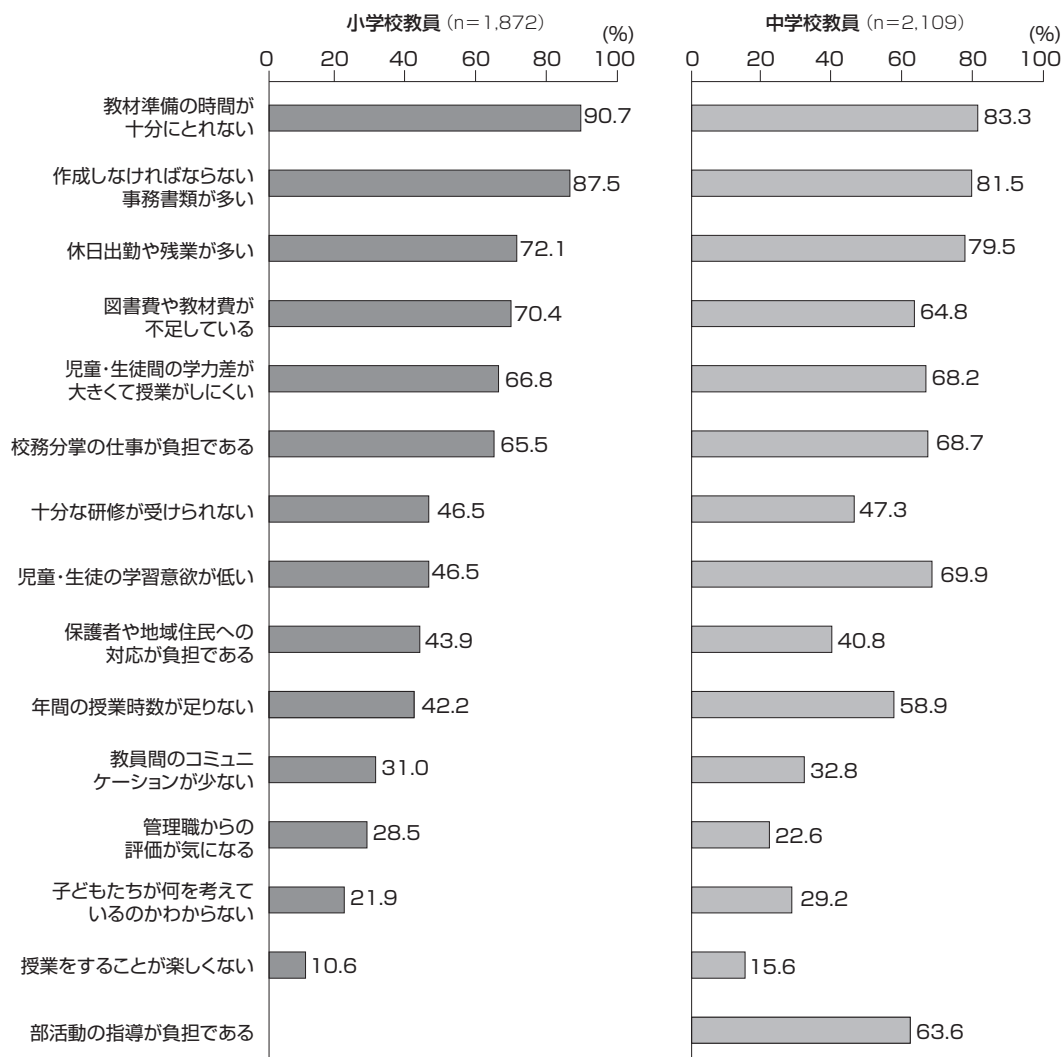
一方、中学校教員では、①「教材準備の時間が十分にとれない」(83.3%)、②「作成しなければならない事務書類が多い」(81.5%)、③「休日出勤や残業が多い」(79.5%)、④「生徒の学習意欲が低い」(69.9%)、⑤「校務分掌の仕事が負担である」(68.7%)となっている。こうしてみると、第1位から第3位までは、小・中学校で共通しており、教員は日々の忙しさに悩みを感じていることがわかる。

2) 中学校教員のほうが、 学習指導にかかわる悩みを感じている

一方で、小・中学校での違いもみられた。「児童・生徒の学習意欲が低い」は、中学校教員では69.9%で4番目に多かったのに対し、小学校教員では46.5%であり、20ポイント以上低かった。また、「年間の授業時数が足りない」についても、中学校教員では58.9%だったのに対し、小学校教員では42.2%と16.7ポイント低かった。このように、教科担任制がとられている中学校教員のほうが、小学校教員よりも、学習指導にかかわる悩みを感じていることがわかる。

また、これ以外にも、中学校教員のみなたずねた「部活動の指導が負担である」という悩みについては、63.6%が「そう思う」と回答しており、中学校教員の仕事に占める部活動指導の

図9-2-1 教員の悩み（小・中学校教員）



注1) 数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 小学校教員には「部活動の指導が負担である」はたずねていない。

負担の大きさを垣間見ることができる。

3) 小6生と中1生の間で「児童・生徒の学習意欲が低い」という回答が大きく増加

こうした悩みには、どのような要因がかかわっているだろうか。前述のように、教員の業務は多岐にわたるため、本調査ではさまざまな種類の悩みをあわせてたずねている。しかし、悩みの性質によって、想定しうる要因は異なると思われる。そこでここでは、子どもの発達段階や学習内容の違いが悩みの程度にかかわっていると想定できるものとして、学習指導や生活指導にかかわる悩みについてみてみたい。

図9-2-2は、学習指導や生活指導にかかわる4項目について、学年別にみた結果である。「年間の授業時数が足りない」について「そう思う」と回答した割合をみると、小1生から小4生の担当教員では4割前後であるが、高学年（小5～小6生）になると5割程度に増加する。そして、中1～中2生では6割になり、中3生で若干減少している。「児童・生徒の学習意欲が低い」についても、学年による違いは類似の傾向であり、小1～小2生の担当教員では3割台だが、徐々に増加して小3生から小6生では5割前後になる。そして、中1～中2生では大きく増加して7割を超えるが、中3生では、高校受験が目前に迫っているためか61.7%に減少している。これらの2項目は、学年が上がるにつれて「そう思う」の割合が増加すること、小6生と中1生の間でのギャップが目立つこと、そして中3生で若干減少すること、が共通している。

「子どもたちが何を考えているのかわからな

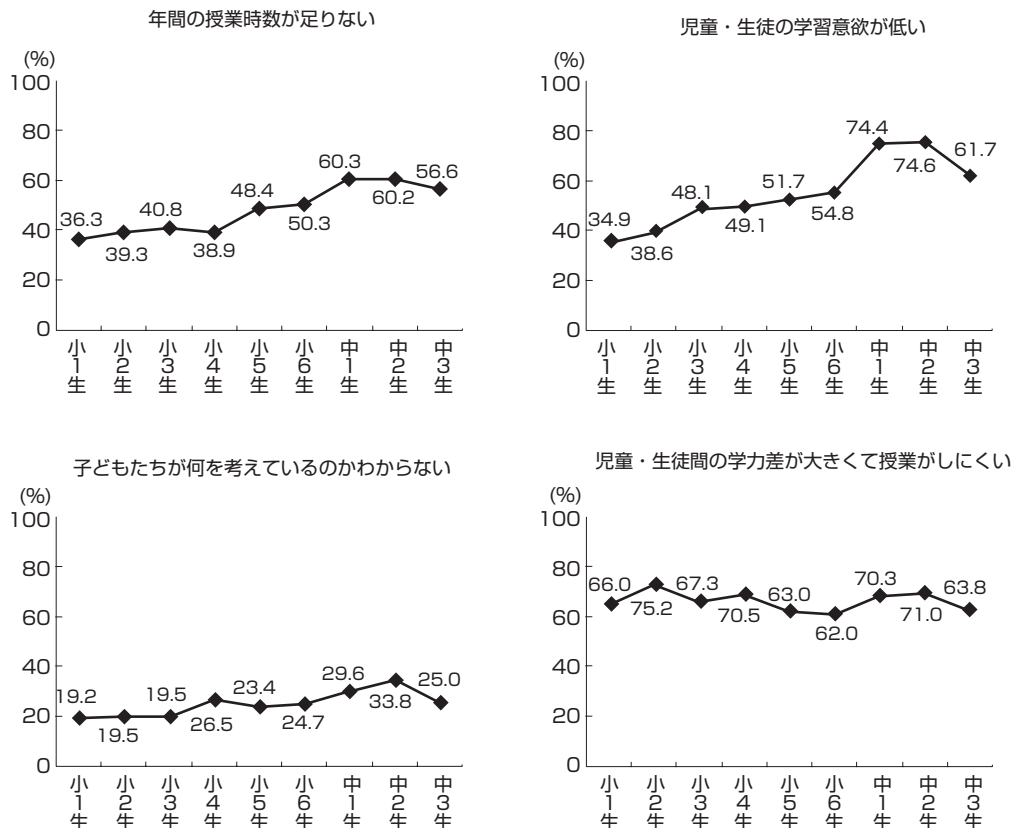
い」も、学年が上がるにつれて増える傾向にあり、小3生の担当教員までは2割弱であるが、小4生から中1生では2割台となっている。そして、中2生で33.8%ともっとも多くなっている。「児童・生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」は、学年の上昇にともなう一方向での傾向がみえるわけではないが、小・中学校ともに「そう思う」という回答が、最高学年（小6生、中3生）でもっとも少なくなっている。

4) 生徒間の学力差が大きいと感じるのは、外国語と数学の教員

学習指導にかかわる悩みに関しては、教科特性による違いが考えられる。そこで、学習指導にかかわる3項目について、中学校教員の担当教科別に違いをみたものが図9-2-3である。これによると、「年間の授業時数が足りない」に「そう思う」と回答した割合は、理科の教員のみが低く50.8%で、他の4教科では6割程度だった。「生徒の学習意欲が低い」については、担当教科による違いはみられなかった。少なくとも教員の意識としては、生徒の学習意欲の低さは教科によって異なるものではない、一般的な傾向のようである。

一方、「生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」に「そう思う」と回答した割合は、外国語で76.9%、数学で76.2%と高くなっている。次いで、国語が66.4%、理科が63.7%であり、社会は55.8%だった。教科特性によって、学力差が授業進行におよぼす影響は異なるだろうが、実際に外国語や数学で、学力差が顕在化しやすいのかもしれない。

図9-2-2 教員の悩み（小・中学校教員／学年別）

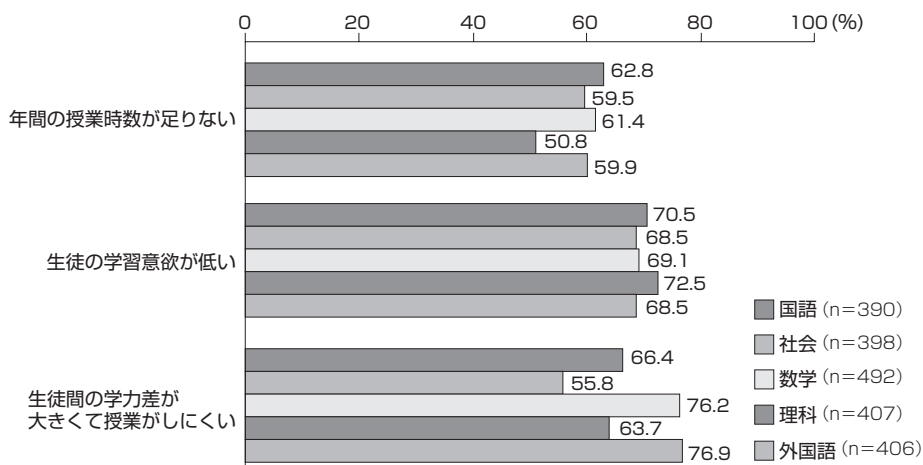


注1) 数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 15項目のうち4項目を抜粋。

注3) サンプル数は、小1生292名、小2生303名、小3生272名、小4生265名、小5生308名、小6生336名、中1生652名、中2生668名、中3生752名。

図9-2-3 教員の悩み（中学校教員／担当教科別）



注1) 数値は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 15項目のうち3項目を抜粋。

第3節

教員生活への満足感

子どもや職場、保護者や地域などに対しては、6～7割の教員が満足しており、総合的にみても7割が満足している。一方、学習指導について満足している教員は5割台、私生活とのバランスについては4割台にとどまる。【Q17、18(教員)】

前節では、教員が忙しさに悩みを感じていることがわかった。しかし、教員生活を続けていくなかでは、こうした大変さと同時に、満足感や充実感も感じているだろう。そこで本節では、満足感という観点から、教員の意識についていきたい。なお、日々の仕事のなかで、どのような点に満足していて、どのような点に満足していないのかを明らかにするため、総合的な満足感に加えて、「子どもとの関係」「現在の職場」「保護者や地域との関係」「学習指導」「教員生活と私生活とのバランス」という5つの観念に分けて満足感をたずねている。

1) 子どもや職場、保護者や地域などに対しては、おおむね満足

小学校教員について、観点ごとの満足感を示したものが図9-3-1である。これによると、「満足している」（「とても満足している」+「まあ満足している」の%、以下同）という回答がもっとも多かったのは、「子どもとの関係」で79.5%であった。次いで「現在の職場」が78.7%となっている。さらに「保護者や地域との関係」が68.6%で続いている。これに対して、「学習指導」について「満足している」という回答は52.5%とほぼ半数であり、「教員生活と私生活とのバランス」については46.3%であった。

こうしてみると、子どもや同僚、保護者や地域など、日々の教育活動で接する人々と環境に

ついては、多くの教員が満足しているが、忙しさという悩みにも表れているように、学習指導や私生活とのバランスについては、十分に満足できないというのが現状のようである。

2) 私生活とのバランスについての満足感はやや低め

図9-3-2は中学校教員の結果を示したものであるが、基本的な傾向は小学校教員と同様である。すなわち、「子どもとの関係」「現在の職場」については7割台、「保護者や地域との関係」については6割台の教員が満足している一方で、「学習指導」については5割台、「教員生活と私生活とのバランス」については4割台の教員が「満足している」と回答するにとどまっている。

小学校教員との違いとしては、「子どもとの関係」や「保護者や地域との関係」「教員生活と私生活とのバランス」について「満足している」という割合が、5ポイント程度低いことがあげられる。「子どもとの関係」については子どもの発達段階が異なり、かつ教科担任制であることから、子どものかかわり方が異なることが関連していると考えられる。また、「教員生活と私生活とのバランス」(小学校教員46.3%>中学校教員41.1%)については、8章でみたように、中学校教員のほうが、退勤時刻が遅いことや、前節で示した休日出勤や残業、部活動指導の負担感などが関係して満足感が低くなっているものと考えられる。

3) 総合的には、7割が自分の教員生活に満足

このように、教員生活の側面によって、満足感の程度は異なっていることがわかった。とはいえ、全体としてみれば、自分自身の教員生活には満足しているようだ。これを示すのが、「総合的にみて、ご自身の教員生活に、どれくらい満足していますか」とたずねた結果である（図9-3-3）。これからわかるように、小学校教員で

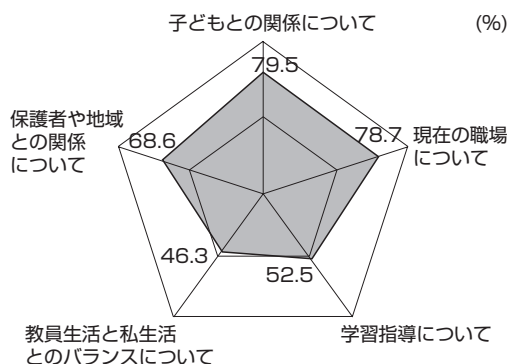
は74.0%、中学校教員では72.4%が、総合的にみて自分自身の教員生活に「満足している」と回答している。

4) 女性のほうが「教員生活と私生活とのバランス」に対する満足感が低い

次に性別に満足感の違いをみたものが、表9-3-1である。これによると、「教員生活と私生活

図9-3-1 教員生活への満足感（小学校教員）

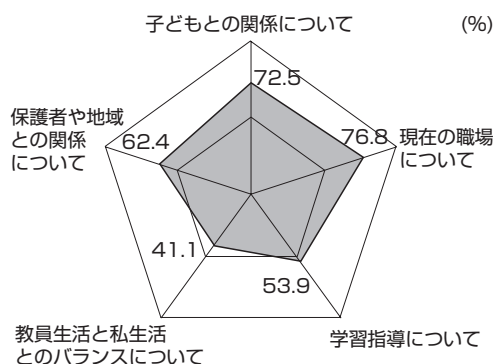
(n=1,872)



注) 数値は「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

図9-3-2 教員生活への満足感（中学校教員）

(n=2,109)



注) 数値は「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

図9-3-3 教員生活への総合的な満足感（小・中学校教員）

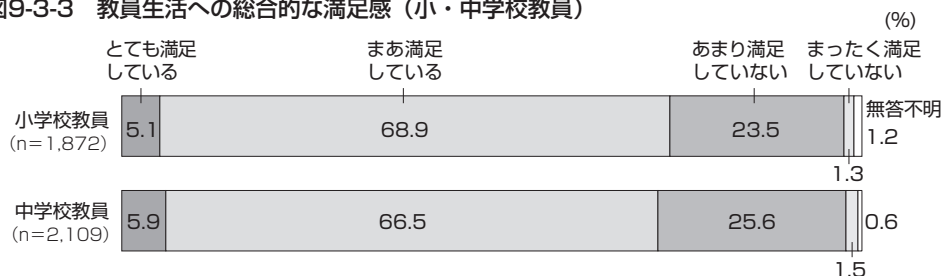


表9-3-1 教員生活への満足感（小・中学校教員／性別）

(%)

	小学校教員		中学校教員	
	男性 (n=664)	女性 (n=1,194)	男性 (n=1,361)	女性 (n=742)
子どもとの関係について	76.8	80.9	72.7	72.3
現在の職場について	79.1	78.7	77.4	75.7
保護者や地域との関係について	68.4	68.8	61.8	63.6
学習指導について	51.3	53.2	57.2	48.0
教員生活と私生活とのバランスについて	52.6	42.9	42.9	37.7
総合的にみて	77.0	72.3	72.3	72.4

注) 数値は「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

とのバランス」については、小・中学校の教員ともに、男性より女性のほうが「満足している」との回答が少ない（小学校：男性52.6%>女性42.9%、中学校：男性42.9%>女性37.7%）。これは、家庭をもつ女性が、仕事と同時に家事や子育てなどを行っており、忙しいといった背景があるものと推測される。

また、中学校教員については、「学習指導」について「満足している」という回答が、男性より女性のほうが少ない（男性57.2%>女性48.0%）。この背景には、前述のような家事や子育てとの両立による忙しさがあると考えられる。ただしこれには、担当教科別に満足度の違いをみた場合、理科と数学で高く、国語が低い、ということが関係している可能性も考えられる（理科60.2%、数学56.5%、社会51.5%、外国語51.5%、国語48.2%、図表省略）。というのも、男女構成比は、教科によって異なるからである。本調査の回答者についていえば、数学と理科（と社会）は8割前後が男性教員であり、国語と外国語は6割程度が女性教員であった（図表省略）。教科特性を背景として「学習指導」に対する満足度に性差がみられた可能性もあり、この点はさらなる検討が必要だろう。

5) 「学習指導」に関する満足度は、 教職経験年数を重ねるにつれ増加

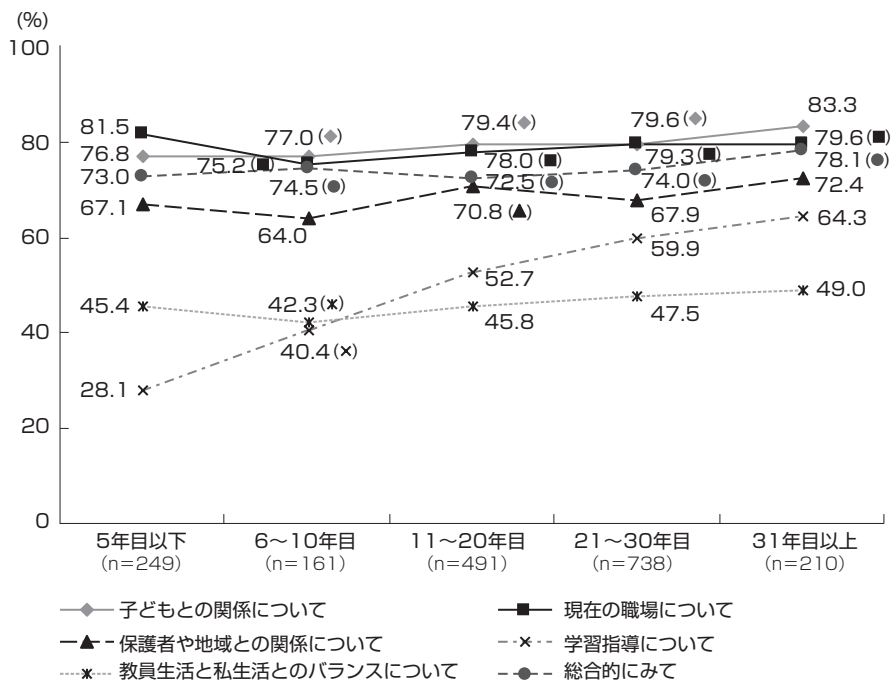
最後に、教職経験年数別に、満足度の違いをみておこう。小学校教員についての結果が、図9-3-4、中学校教員についての結果が図9-3-5

である。これによれば、小・中学校の教員ともに、「学習指導」に関する満足度は、教職経験年数を重ねるにつれて、顕著に増加する。たとえば、小学校教員が「学習指導」について「満足している」という回答は、「5年目以下」では28.1%であるが、「6～10年目」40.4%、「11～20年目」52.7%、「21～30年目」59.9%、「31年目以上」64.3%となっている。経験を積むなかで知識や技術を身につけ、自分自身が納得した学習指導ができる教員が増えるものと考えられる。

一方で、「子どもとの関係」「保護者や地域との関係」「現在の職場」については、こうした違いはあまりみられない。一部で数ポイントの差はあるが、教職経験年数が長ければ満足度が高いわけではない。子ども、保護者・地域、職場に対する満足度の違いは、教員自身の経験というより、いわば環境の違いであり、経験によって満足度が異なるというものではないようである。

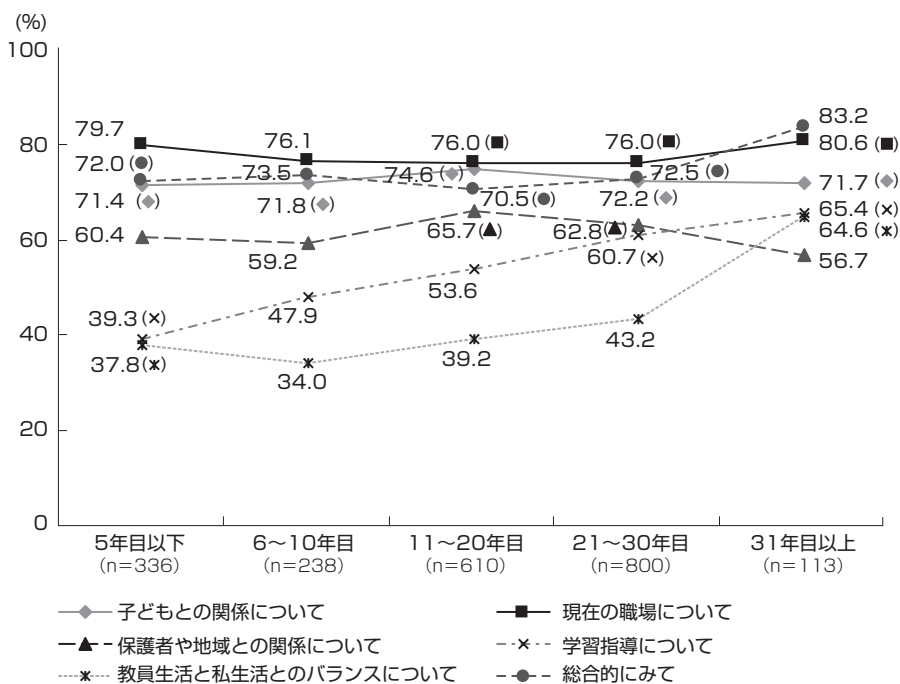
最後に、「教員生活と私生活とのバランス」や「総合的な」満足度についてみると、中学校では「31年目以上」の教員で「満足している」という回答が多くなっている。しかし、それ以外ではあまり体系的な差はみられない。全体としてみれば、自分自身の学習指導に対する満足度については、教職経験の蓄積が大きく結びついていくが、そのほかの観点については、必ずしも教職経験に基づくものではないということがわかる。

図9-3-4 教員生活への満足感（小学校教員／教職経験年数別）



注) 数値は「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

図9-3-5 教員生活への満足感（中学校教員／教職経験年数別）



注) 数値は「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

第4節

将来展望

小・中学校とも、およそ半数の教員が、「管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい」と回答。また、性別にみると、男性のほうが女性よりも、「できれば、将来管理職になりたい」と回答する割合は高い。【Q19(教員)】

これまでは、悩みと満足感という観点から、現在の教員生活に対する意識をみてきた。本節では、将来に対する意識をみていくことにしたい。具体的には管理職志向の有無と教員離職の可能性という点から、将来展望をたずねた。この設問は、小学校の98年調査、中学校の97年調査でもたずねている。

1) およそ半数の教員が、管理職ではなく、一教員として働きたい

図9-4-1で07年調査の結果をみると、小学校教員のもっとも多い回答は「管理職にはならず、一教員としてずっと児童を前にして働きたい」の49.3%だった。次いで「いずれは教員を辞めたいと思っている」が20.1%、「特に考えたことはない」が16.0%と続く。「できれば、将来管理職になりたい」は10.4%、「今、真剣に教員を辞めたいと思っている」は2.1%だった。この結果について、98年調査から大きな変化はみられなかった。

中学校教員についてもほぼ同様の結果で、07年調査のもっとも多い回答は「管理職にはならず、一教員としてずっと生徒を前にして働きたい」の46.9%であり、97年調査からそれほど大きな変化はみられなかった。

2) 管理職志向は男性のほうが多い

小・中学校教員のそれぞれについて、性別に

分けて、将来展望の違いをみたものが表9-4-1である。これによると、小・中学校の教員とも、「できれば、将来管理職になりたい」という回答は、女性より男性のほうが多く、反対に「管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい」という回答は、女性のほうが男性より多い。また、「いずれは教員を辞めたいと思っている」という回答は女性のほうが多く、反対に「特に考えたことはない」という回答は、男性のほうが多い傾向がみられた。

3) 教職経験「11～20年目」以降で、離職を考えている教員がやや増加

さらに、教職経験年数別に将来展望の違いをみたものが表9-4-2である。これによると、中学校教員では「21～30年目」で管理職を志向する割合（「できれば、将来管理職になりたい」）が22.4%と高くなっている。これは、この年代が実際に管理職試験を受けるかどうかを考える年代にあたることに加え、回答者の構成上でこの年代の男性比率が高いことが関係しているかもしれない。また、小・中学校ともに、「31年目以上」では、管理職志向はほとんどみられない。これは、管理職試験を受ける中心的な年代を過ぎていたためと思われる。

他方、離職の可能性（「いずれは教員を辞めたいと思っている」）については、小・中学校で多少の違いはみられるものの、「11～20年目」以

降に徐々に増えて2割前後となっている。
 このように、性別や教職経験年数によって、

将来展望は異なることがわかる。

図9-4-1 将来展望（小・中学校教員／経年比較）

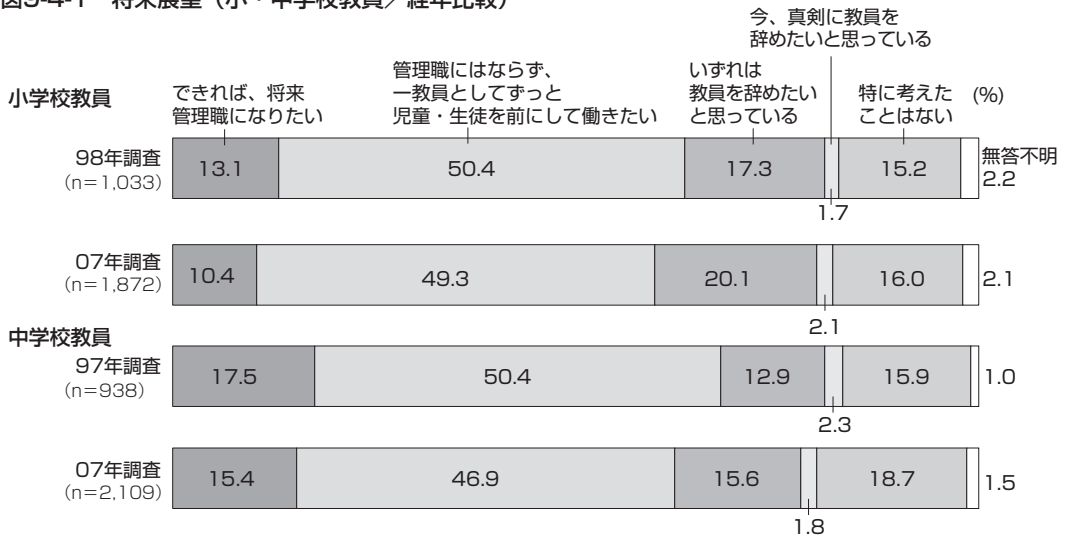


表9-4-1 将来展望（小・中学校教員／性別）

(%)

	小学校教員		中学校教員	
	男性 (n=664)	女性 (n=1,194)	男性 (n=1,361)	女性 (n=742)
できれば、将来管理職になりたい	24.7	2.5	22.2	3.1
管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい	39.5	54.9	42.5	54.9
いずれは教員を辞めたいと思っている	9.9	25.7	12.1	22.1
今、真剣に教員を辞めたいと思っている	1.1	2.7	1.7	1.9
特に考えたことはない	22.4	12.3	20.2	16.0
無答不明	2.4	1.9	1.2	2.0

表9-4-2 将来展望（小・中学校教員／教職経験年数別）

(%)

	小学校教員					中学校教員				
	教職経験年数別					教職経験年数別				
	5年目以下 (n=249)	6~10年目 (n=161)	11~20年目 (n=491)	21~30年目 (n=738)	31年目以上 (n=210)	5年目以下 (n=336)	6~10年目 (n=238)	11~20年目 (n=610)	21~30年目 (n=800)	31年目以上 (n=113)
できれば、将来管理職になりたい	8.4	13.7	13.6	10.8	1.0	8.3	11.8	14.1	22.4	3.5
管理職にはならず、一教員としてずっと児童・生徒を前にして働きたい	54.6	43.5	43.2	50.3	59.0	56.5	50.4	44.6	42.3	57.5
いずれは教員を辞めたいと思っている	10.0	13.7	19.3	24.5	22.4	10.4	11.8	16.4	17.1	22.1
今、真剣に教員を辞めたいと思っている	0.8	0.0	0.4	3.1	5.7	1.8	1.3	1.3	1.5	7.1
特に考えたことはない	22.9	28.0	21.2	9.6	9.0	21.7	24.4	22.0	14.6	9.7
無答不明	3.2	1.2	2.2	1.6	2.9	1.2	0.4	1.6	2.1	0.0

第5節

教員生活に対する思い
(自由記述分析)

教員生活の悩み・楽しさに共通して多かったのは、「学習指導」「子どもとのかかわり」に関連した回答であった。一方、「私生活とのバランス」は悩みの分類だけにしかみられなかった。【Q20(教員)】

本節では、教員生活のなかで日々感じている楽しさや悩みについての自由記述を分析する。

自由記述欄に回答した小学校教員968名（うち「悩み」の有効回答件数559件、「楽しさ」489件）、中学校教員1,137名（うち「悩み」619件、「楽しさ」528件）をみていく。分類に際しては楽しさと悩みに分けてカウントしているため、1つの回答で楽しさと悩みに1件ずつカウントされる場合がある。なお、回答例（一部抜粋を含む）については明らかな誤字・脱字を除き原文どおりとした。

分析の説明に入る前にカテゴリー化の手順について簡単に述べたい。はじめに、自由記述欄にある回答を「悩み」と「楽しさ」に分類した。その後、「悩み」について、小学校教員は22の小分類、中学校教員は19の小分類に振り分けた。同様に「楽しさ」について、小学校教員は9の小分類、中学校教員は8の小分類に振り分けた。次に「悩み」の小分類を8つの大分類に、「楽しさ」の小分類を4つの大分類にまとめ直している。

1) 教員生活の「悩み」

教員生活の「悩み」の回答は大きく8つに分類することができた。それぞれの種類の有効回答件数は図9-5-1のとおりである。

小・中学校教員に共通して多いのが、「学習指導」「子どもとのかかわり」「保護者対応」「私生活とのバランス」である。他方、「校務分掌・部活動指導」「教育行政」については、いずれも中学校教員の回答の多さが目立っている。

以下、種類別に具体的な回答例を示して、その特徴を描いていく。

① 悩み—学習指導（小学校教員：100件、中学校教員：91件）

学習指導における悩みの代表的な回答としては、小・中学校教員ともに、「教材研究や授業の準備が十分にできない」（小：57件、中：53件）、「学習効果があがらない、指導力に不安や課題がある」（小：30件、中：24件）の2つが大半を占めている。校務分掌や事務処理などに追われ、本来重視すべき教材研究まで時間が足りないなど、苦悩をしている教員の姿が浮き彫りとなった。

ほかにも、「学力低下、学力格差への対応が難しい」（小：8件、中：14件）、「授業に集中できない、落ち着かない子どもへの対応」（小：5件、中：なし）といった児童・生徒の質的な変化をうかがわせる回答もあった。

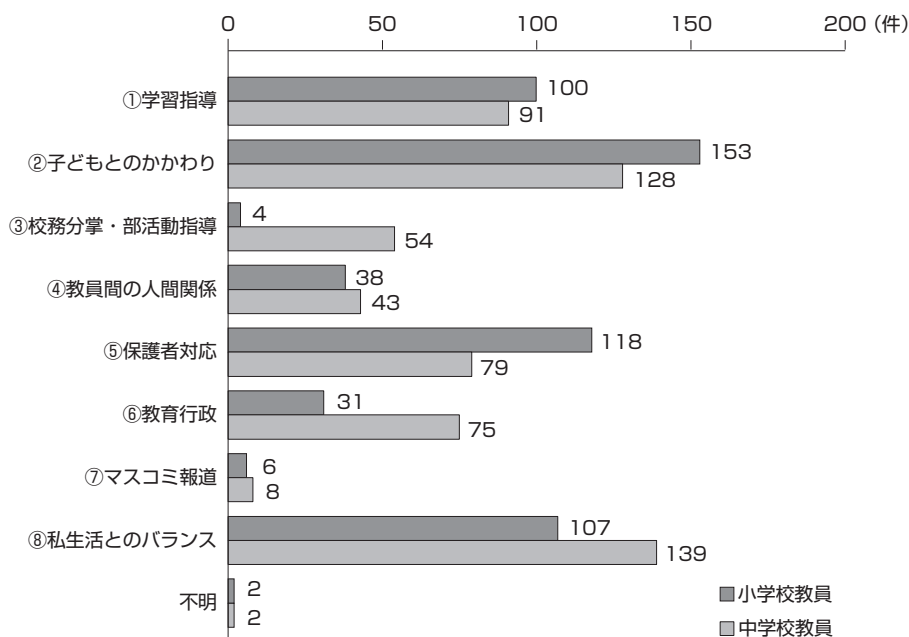
【小学校教員】（ ）内は回答者の性別と年齢区分を示す。

- ・ 十分な教材研究ができず満足はいく授業ができない。特に総合の準備は大きな負担となっている。(女性、51～60歳)
- ・ 授業がうまくいくと楽しいが、うまくいかない、または、児童の学力が伸びないと、この仕事をしていてよいのかと思う。(男性、31～40歳)
- ・ じっくりに行っている子（理解のはやい子）と行っていない子（理解のおそい子）の学力差が大きい。40人いるのでなかなか個別指導の時間がとれない。(女性、25歳以下)
- ・ 授業に集中できない子どもへの対応について、日ごろ苦勞しています。(話を聞く！ということが難しい子どもが多いです。)(女性、25歳以下)

【中学校教員】

- ・ 担任、分掌の事務が多く、学級をかえりみたり教科の教材研究をする時間がなかったりして、中途半端で不完全なまま学級経営、授業をしてしまう。(女性、26～30歳)
- ・ 子どもの気持ちかわからなかったり、子どもの期待に沿えない力不足を感じる場面が多い。子どもにつけさせたい力をつけられないという現状をどうにかしたいと思って努力はしているつもりなのだが改善できない。(女性、31～40歳)
- ・ 勉強が苦手な生徒にとっては、学習内容は難しいし、得意な生徒にとっては物足りなく、入試問題などの理解には結びつかない。きちんとした学力をつけるための反復練習をする時間が取れない。(女性、41～50歳)

図9-5-1 教員生活の「悩み」



注) 自由記述に回答した小学校教員968名(うち「悩み」の有効回答件数559件)、中学校教員1,137名(うち「悩み」619件)を分析対象とする。なお、集計に際しては1つの回答につき、楽しさと悩みに分けて最大1件ずつカウントをしている。

② 悩み—子どもとのかかわり（小：153件、中：128件）

子どもとのかかわりにおける悩みの代表的な回答として、「(事務仕事が多く) 子どもと向き合う時間がない」(小：96件、中：58件) がもっとも多かった。次いで「子どもとの関係づくりやコミュニケーションに悩む」(小：19件、中：48件) の回答だが、これは小学校教員よりも中学校教員に多い悩みと考えられる。

また、小・中学校教員に共通していたのが、「自己中心的な子ども、基本的な生活習慣が身につけていない子どもへの対応が難しい」(小：16件、中：16件)。一方、小学校教員を中心に出てきた回答として、「不登校の子どもや、発達障害など特別支援が必要な子どもへの対応が難しい」(小：18件、中：6件)、「家庭環境に問題を抱えた子どもへの対応」(小：4件、中：なし) がある。教員には多様な児童・生徒への対応が求められており、そのことが悩みの1つとなっている。

【小学校教員】

- ・ 放課後や休けいなど、子ども達と触れ合いたいのにな、職員室に集まったり、事務処理に追われることが多くあったりして、子ども達と関係を深められない。(男性、31～40歳)
- ・ 子どもたちに自分なりに一生懸命に関わっていますが、うまく伝えられなかったり、子どもが納得できなかつたりすると悩みます。(男性、41～50歳)
- ・ 発達障害の子どもを周りの者にどう理解させればいいのか悩んでいる。(女性、41～50歳)

【中学校教員】

- ・ 生徒との触れ合いが楽しい。それなのに、次々と事務的な仕事をこなさなければならず、生徒に対する時間がぐんと減少してしまった。(女性、51～60歳)
- ・ 生徒と話していて、こちらの気持ちを理解していないなあと感じる時があります。(言葉や態度で) そういうことが重なるとつらいなあと感じることがあります。(女性、41～50歳)

③ 悩み—校務分掌・部活動指導（小：4件、中：54件）

つづいて、校務分掌・部活動における悩みの代表的な回答は、「校務分掌の負担が不公平である」(小：3件、中：9件) と、中学校教員を中心とした「部活動の指導が負担である」(小：1件、中：45件) の2つである。

とくに部活動の指導は時間的な拘束感が強くうかがえ、他の業務を圧迫している可能性が示唆される。

【小学校教員】

- ・ 特定の人間に仕事が片寄ること。適材適所でみな平等がよい。年輩の方に言えないことが多い。(女性、26～30歳)

【中学校教員】

- ・ 仕事の負担が特定の教師に偏りすぎていると思います。授業、分掌、部活以外にも、区や研究会の仕事など、特定の人に集中しすぎます。(男性、41～50歳)
- ・ 土、日も部活の指導や大会があつて休めないこと。自分の自由な時間が少ないと、気分がリフレッシュできず、勤労意欲が低下してしまう。(女性、41～50歳)

④ 悩み—教員間の人間関係（小：38件、中：43件）

教員間の人間関係における悩みの代表的な回答は、「教員間の意思疎通、人間関係に悩む」(小：

35件、中：36件)であった。加えて、少数意見であるが、「教員の能力や意欲の低下」(小：3件、中：7件)という回答もみられた。

【小学校教員】

- ・ 教師間の温度差、考え方のちがいをへの対応が疲れる。(女性、31～40歳)
- ・ 職員も年配と若い教師に分かれ、意志疎通がはかられず、ストレスの原因になる。(女性、51～60歳)

【中学校教員】

- ・ 教師間の共通理解や協働歩調が難しさを感じる。管理職との意識の違い、成果主義の導入が辛い。(女性、41～50歳)

⑤ 悩み—保護者対応 (小：118件、中：79件)

保護者対応における悩みの代表的な回答は、「保護者への対応が難しいと感じる」(小：118件、中：79件)である。放任と過干渉というまったくタイプの異なる保護者に悩まされたり、そうした困った保護者が年々増えたりしている、と訴えている。

とりわけ中学校教員では「モンスター・ペアレンツ (ト)」という言葉を用いているケースが散見され、「モンスター・ペアレンツ (ト)」に関するマスコミ報道が教員の間で実感をともなって受け止められていると考えられる。

【小学校教員】

- ・ 保護者の中には、「我が子」しか見ない親も多く、子ども同士のトラブルも多いが保護者同士のトラブルに気をもむことが大変多く、憂うつになることもある。(女性、26～30歳)
- ・ 放任や過干渉の保護者への対応に困ることがある。(女性、41～50歳)

【中学校教員】

- ・ 話題のモンスターペアレンツ、本当に自己中心的な親が増えていると思う。対応には大変悩む。(女性、41～50歳)
- ・ 価値感の多様化の中で、保護者の学校に対する要求や要望が年々増えているように感じられ、これからも学校は、大変だと思っています。(男性、41～50歳)
- ・ 生徒の親が自分の子どもの言うことだけを信じ、自分の子が悪くなく、他の子が悪いと思いついで学校に文句を言うてくることがある。親の対応、下校後や休日の指導など、仕事の範囲が広いのが悩みである。(女性、51～60歳)

⑥ 悩み—教育行政 (小：31件、中：75件)

教育行政における悩みの代表的な回答をみていく。小・中学校教員に共通していたのが、「賃金や労働条件に不満がある」(小：19件、中：19件)だった。中学校教員に多い回答として、「教育行政が現場の状況とかけ離れていると感じる」(小：5件、中：42件)、「授業時数、人員の不足」(小：2件、中：14件)の2つがあげられる。小学校教員では「一学級の人数が多く、学習指導や学級運営が難しい」(小：5件、中：なし)と、一学級を編成する人数を減らして欲しいとの声が出ていた。

【小学校教員】

- ・ 近年、子どもと接する時間がとれなくなり、教職の魅力が薄れてきた。自己評価、レポート提出法定研修など、身動きがとれなくなっている。児童数は少なくなっているが手

のかかる児童は多くなってきているし、保護者の対応にも気を遣う。もっと現場の生の声を聞いて、よりよい教育改革を行ってほしい。(女性、31～40歳)

- ・能力や業務内容が給与に反映しない。(男性、41～50歳)

【中学校教員】

- ・評価の方法や総合学習、職場体験など、変化が大きく、十分な議論がなされないうちに降りてくることが多い。数年で見直されたり、現場で不評なことは実施にうつす前によく検討すべきと思う。「結局、昔の方が良かった」ということが多すぎる。(男性、41～50歳)
- ・勤務時間をしっかり守れないことが1番の悩みです。持ちかえる仕事も結構あります。部活動の位置づけもあいまいです。私たちは、ボランティアとして働いているのではないので、労働者としての時間を、きちんと守っていききたい。(女性、41～50歳)

⑦ 悩み—マスコミ報道 (小：6件、中：8件)

マスコミ報道における悩みであるが、このカテゴリーの代表的な回答としては「教員・学校に関するマスコミ報道」(小：6件、中：8件)であった。マスコミ報道が学校の悪い面ばかりに目を向けることに対して憤りを表している。

【小学校教員】

- ・マスコミの教育問題を増長しているような取り上げ方に大きな不満がある。マイナス要素の強いニュースが多く、プラス要素のものが少ない。頑張っている先生の姿をもっと取り上げ、世間の学校不信を助長しないようにしてほしい。(男性、31～40歳)

【中学校教員】

- ・マスコミによる、公務員イメージの低下。がんばっている人間はいるけれど、負のニュースのみがとりあげられて、連日、どのチャンネルでも同様の内容を放送している。メディアは、子供たちの「第二の教科書」となりつつあると思うが全ての放送を通じて、もっとその責任の重さを教師以上に感じてほしい。(男性、31～40歳)

⑧ 悩み—私生活とのバランス (小：107件、中：139件)

最後に、私生活とのバランスにおける悩みの代表的な回答をみていく。小・中学校教員ともに頻出する回答として、「家庭生活や子育てとの両立が難しい」(小：50件、中：56件)、「多忙でゆとりがない。休みがとれない」(小：46件、中：71件)の2つがある。また「体力や心身の健康に不安を感じる」(小：11件、中：12件)と、仕事の多忙さを受けて自身の健康を危惧する回答もみられた。

【小学校教員】

- ・ゆとりのある時間が持てない。勤務時間内に仕事が終わらないため、遅くまで残業したり、家に持ち帰って休日でも平日も仕事をしている。教材研究以外の書類作りや仕事が多い。子供たちとゆっくり関われる時間がとれず、コミュニケーション不足を感じる。(女性、31～40歳)
- ・「こんな指導をしたい」という思いが強ければ強いほど時間が足りない。プライベートな時間・睡眠時間を削り、授業の準備等にあてている。現在は問題はないが、5年後、10年後を考えると、体力面、健康面で不安を感じることもある。(女性、41～50歳)

【中学校教員】

- ・仕事を熱心に行えば行うほど生徒や保護者から信頼を得られるが、同時に自分の時間や家庭でのだんらん等が全くなり、苦痛も生じるそのバランスをとるのに苦労している。(男性、31～40歳)
- ・とても仕事が多く、忙しいと思います。学校によっては年休が取りにくかったり、お昼の休憩時間が後取りでさらに大変なところもあるようです。教員の忙しさがあまり世間に伝わっていないような気がします。(女性、25歳以下)
- ・長時間労働や精神的ストレス等劣悪な労働環境の中で、健康を害す同僚が多く、自分自身の健康状態も気になります。(男性、41～50歳)

2) 教員生活の「楽しさ」

悩みを抱えながらも、教員生活を支える「楽しさ」をどのようなところに感じているのだろうか。教員生活の「楽しさ」の回答は4つに大別した。それぞれの種類の有効回答件数は図9-5-2のとおりである。小・中学校教員ともに「子どもとのかかわり」がもっとも多く、次いで「学習指導」となっており、この2つが「楽しさ」の回答の大半を占めている。

①楽しさ—学習指導(小学校教員:104件、中学校教員:76件)

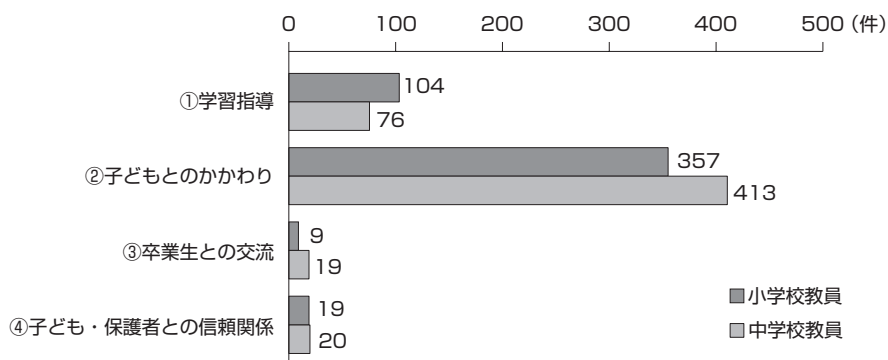
学習指導における楽しさの代表的な回答は、「子どもが『わかった』『できた』という達成感を得ることができたとき」(小:70件、中:52件)、「子どもの意欲を引き出すような授業、自分の納得のいく授業ができたとき」(小:34件、中:24件)の2つであった。

授業を通して子どもたちが学習意欲を高めてくれることは、多くの教員にとって仕事の楽しさを実感する場面といえる。

【小学校教員】

- ・子どもたちが学習意欲を高めてくれた授業ができた時に喜びを1番感じる。(男性、41～50歳)
- ・子供たちができなかったことができるようになったり伸びた!と実感している顔をみたり、み

図9-5-2 教員生活の「楽しさ」



注) 自由記述に回答した小学校教員968名(うち「楽しさ」489件)、中学校教員1,137名(うち「楽しさ」528件)を分析対象とする。なお、集計に際しては1つの回答につき、楽しさと悩みに分けて最大1件ずつカウントをしている。

んなで1つのことをやりとげた満足感を味わった時うれしいなと思います。(女性、41～50歳)

- ・「わかった。」「できた」と喜ぶ、子ども達の笑顔を見るのが楽しい。(女性、31～40歳)

【中学校教員】

- ・授業の組み立てをして、準備をするのが楽しいし、授業中の生徒とのやりとりや、理解できた生徒の表情を見るときうれしいし、やりがいを感じる。(女性、51～60歳)
- ・今まで自分が教えている教科が嫌いであったり、苦手意識をもっていた子が「わかった！」と目を輝かせて喜んでくれた時、教職へのやりがいを感じます。(女性、31～40歳)

②楽しさ—子どもとのかかわり (小：357件、中：413件)

子どもとのかかわりの楽しさの代表的な回答は、「子どもとの日々のかかわりやコミュニケーション」(小：152件、中：164件)、「子どもの成長を実感するとき」(小：158件、中：167件)といった回答が圧倒的多数を占めている。

ほかにも「子どもが意欲をもって、何かに取り組んでいるのを見るとき」(小：22件、中：46件)、「行事などに子どもとともに取り組み、作り上げていくとき」(小：22件、中：36件)があがった。小学校教員では「クラスが団結したとき」(小：3件、中：なし)という回答もあった。

このように学習場面にとどまらず、学校行事やふだんの生活を通して、子どもたちが成長していくさまを近くで感じ取れることは、教員の特権といっても過言ではない。

【小学校教員】

- ・子どもと一緒に遊んだり、話をしたりしている時間が一番楽しいです。(女性、26～30歳)
- ・自信をなくしたり消極的な態度をしたりしていた子が、進んで活動したり自分に自信をもてたりする場面に出会うと教師としてのやりがいを感じる。(女性、41～50歳)
- ・どんなことでもいいので、子が必死に何かに取り組んでいる姿を見た時は、「成長しているな」とうれしくなる。(性別などの属性不明)

【中学校教員】

- ・生徒が笑顔であいさつを返してくれたり、たわいもないおしゃべりで笑い合えたりした時が楽しく幸せを感じます。(女性、41～50歳)
- ・毎日のかかわりの中で、生徒の今まで見えてこなかったよい面に気づき、伸ばしてやれた時は充実感がある。(男性、31～40歳)
- ・授業において、また学校行事等において生徒や職員と一体となって活動していると感じられる時、楽しさを感じる。(女性、41～50歳)

③楽しさ—卒業生との交流 (小：9件、中：19件)

卒業生との交流における楽しさの代表的な回答は、「卒業した子どもとの交流」(小：9件、中：19件)であった。在学中だけでなく、卒業後も同窓会などの機会を通じて教え子と接点がある。このことを楽しみにしている教員は少なくない。

【小学校教員】

- ・教え子が成人し、同窓会に呼んでくれたり、結婚式に呼んでくれたり、卒業後もコミュニケーションがもてることに喜びを感じている。(男性、41～50歳)
- ・教え子に久しぶりに会って、成長している姿を目にした時。(男性、41～50歳)

【中学校教員】

- ・ 一番楽しいのは卒業生との交流。成長した姿を目にするのがうれしい。(女性、41～50歳)
- ・ 生徒が卒業して(成人となって)、中学校の頃のあの授業、あのとときの指導、行事やクラスでがんばったことなどを思い出話として語ってくれたとき、あのとときはつらかったけど、あの指導でよかったんだとか、不満があっても、許し合えたり謝り合うことができたとき、うれしく思います。(男性、41～50歳)

④楽しさ—子ども・保護者との信頼関係(小：19件、中：20件)

子ども・保護者との信頼関係における楽しさの代表的な回答は、「子どもや保護者に信頼されていると感じたときや感謝されたとき」(小：19件、中：20件)であった。

【小学校教員】

- ・ 子供からもらう手紙や、保護者からいただく感謝の言葉や手紙を読むと、勇気が出たり、励まされたりする。(女性、41～50歳)
- ・ 年度の終わりに「ありがとう」と言われたときに、やりがいを感じます。(男性、31～40歳)

【中学校教員】

- ・ 生徒との信頼関係ができたときがうれしい。(女性、41～50歳)
- ・ 生徒や保護者から、感謝の気持ちを言葉や便りで知ったときに教員をやってよかったと思う。(男性、41～50歳)

3) 隣り合わせにある教員生活の「悩み」と「楽しさ」

教員生活の悩みと楽しさについて、具体的な回答を交えて紹介をしてきたが、悩みと楽しさには重なる部分が多い。

たとえば、悩みと楽しさに共通して多かったものとして、「学習指導」「子どもとのかかわり」がある。

「学習指導」においては、授業準備に時間が取れず、学習指導に不安を抱えたりする反面、子どもたちの「わかった」という声に強いやりがいを感じている。また「子どもとのかかわり」に関しても、子どもと向き合う時間が少ないことや、コミュニケーションがうまく行かずに悩んだりすることもあるが、子どもたちとの何気ない会話ややりとりに楽しさを感じている。

一方、悩みの分類だけにしかみられないものもあった。たとえば「校務分掌・部活動指導」「教育行政」といった学校組織や制度に対する悩みや「私生活とのバランス」に代表される悩みが見受けられた。

保護者との関係については、悩みの分類である「保護者対応」にたくさんの声が寄せられていた。しかしながら、楽しさの分類では「子ども・保護者との信頼関係」という声もあがっており、保護者と良好な関係を築くことができれば仕事をする上での励みにもなっているといえよう。

以上みてきたように、教員生活の悩み・楽しさはまさに隣り合わせといえる。教員ならではの悩みや楽しさを知ることで、学校・教員と保護者・地域住民など学校を支える人々の理解が深められることを期待したい。